

相互成長の場としての発達障害児キャンプ

竹内 靖子¹⁾ 坂本 昭裕²⁾

A Case Study on the Positive Effects of Camping on a Child with a Developmental Disorder, the Child's Family and the Camp's Staff

Yasuko TAKEUCHI¹⁾ Akihiro SAKAMOTO²⁾

Key words : family camp, developmental disorder, therapeutic recreation, experiential education, tree-test

1. はじめに

日本において、キャンプは社会教育施設や地域で実践される有益な体験活動の1つである。このキャンプは、今日様々な目的で活用されており、治療的な目的で実践されることもある。北米では、キャンプなどの自然体験を活用した治療プログラムが数多く行われており、1901年にニューヨークのマンハッタン東病院において結核患者へのテント・トリートメントとして病院の中庭で実施されたのが最初といわれている¹⁾。以後、自然体験を活用した治療プログラムは、キャンプ療法(Camping Therapy)、自然体験療法(Outdoor Experiential Education: OET)、レクリエーション療法(Therapeutic Recreation/Recreational Therapy: TR/RT)と呼ばれ、これまでに数多くの実践研究に基づき、教育・医療・福祉分野で有効活用されている。一方、日本では、1950年代から障害のある人のキャンプ実践はあるものの²⁾、その機会は多くはなく、障害のある人の野外体験機会が少ないことが報告されている^{3) 4)}。

ところで、文部科学省が実施した調査によ

ると公立小中学校の通常学級に、発達障害、もしくは類似の様態を示す子どもが6.5%程いることが示唆されている⁵⁾。このように、我が国においては、発達障害児への対応が社会的な課題の1つになっている。このような発達障害児への関わりについては、一人ひとりの課題が個別的であり、対応が難しい。例えば、課題への支援方法に対する周囲の理解不足等により、対人関係のトラブルや精神的な不調等が起こりやすく、集団・社会生活体験機会が閉ざされやすい傾向にあるといえる。したがって、障害を抱える子どもたちを十分に理解し、子どもたちが安心して活動できる場を提供することが喫緊の課題になっているといえよう。

本研究者は、発達障害のある子どもたちの成長を支援するために、キャンプの実践と研究に取り組んでいるが、キャンプにおいても、発達障害のある子ども達が安心して参加できることが重要であると考えている。キャンプは、子どもそれぞれの個性を発揮でき、自分がそのまま価値のある存在だということが感じられる場^{6) 7)}として、学校や家庭以外の居場所として必要であろう。

1) 桃山学院大学社会学部
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1

2) 筑波大学体育系
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

1) Faculty of Sociology,
St. Andrew's Momoyama Gakuin University
1-1 Manabino, Izumi, Osaka (594-1198)

2) Faculty of Health and Sport Science,
University of Tsukuba
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305-8574)

さらに、共に参加する家族やスタッフにとっても意義があると思われる。家族が、学校や家庭以外の環境で、いつもと違った子どもの様子や表情を知ること、親子関係の改善につながることもある。また、家族が周囲の支援に頼るなどレスパイトの場としても有効である。スタッフにおいては、例えば、大学の学生スタッフなどは、障害のある子どもたちとキャンプ生活を共にしながらキャンプカウンセリングを実践し、それぞれの子どもの個性を理解し、かけがえのない存在として尊重することを学ぶ機会となる。学生の多くは、キャンプを通じて障害のある子どもたちと関わりながら自分自身についても理解を深めていくことになる。このように、障害のある子どものキャンプにおいては、障害のある子どもの成長の場となるだけでなく、家族、サポートする学生においても意義深い学びの場として機能する⁸⁾と考えられる。

ところで、キャンプの効果検証研究では、質問紙法などの量的研究方法が多く用いられてきたが、このような方法では、キャンプの全般的な効果を検証することには優れているが、発達障害児のような子ども個人の効果を検討するには適していないと思われる。それは発達障害のある子どもそれぞれに課題があり、キャンプに参加する意味もそれぞれに異なっていることが多いからである。したがって、個別な課題を抱える子どもの場合には、観察法、面接法あるいは、描画法などを通じたキャンプにおける子ども一人ひとりの心の体験世界を事例として記述することが適していると思われる。近年では、このような子どもを対象にしたキャンプの事例研究として風景構成法⁹⁾やバウムテスト¹⁰⁾の変化等を検討することによって、その効果の報告が行われている研究も増えている¹¹⁾¹²⁾。

そこで本稿では、NPO 法人が主催する「キッズファミリーキャンプ」に参加した発達障害児のキャンプ体験事例を報告したい。特に、発

達障害のある少年の内的体験にどのように影響し、どのような内的プロセスが展開したのかについて、参加者・保護者・スタッフへの質的アプローチと描画¹³⁾ (絵日記・バウムテスト)を手掛かりに検討する。そして本事例におけるキャンプ体験活動を通じた発達障害児の心理社会的成長を明らかにし、発達障害児、保護者、スタッフが相互に理解を深めるキャンプ実践の意味を論じることが本稿の目的である。

2. 研究方法

2.1. 研究の対象

NPO 法人が主催する「キッズファミリーキャンプ」に参加した発達障害児 1 名 (以下 A 君と記す) を主対象者とし、対象者と関わったキャンプ参加者、保護者 (母親)、スタッフも研究対象者とした。

2.2. 資料の収集と分析

キャンプを通じた心理・社会的な成長を確認する事例研究を進めるにあたり、基本情報は、NPO 法人 B 入会時に保護者が記入するインテーク用紙 (参加者情報: 連絡先等 (参加者・家族・かかりつけ医)、既往歴、障がい、生活能力、送迎方法、最近の健康・心理状態、必要な支援、不安なこと等が主な項目)¹⁴⁾から収集し、その他情報は以下の要領で資料を収集した。

2.2.1. 参加者へのアンケート (インタビュー) 調査

キャンプ (1 泊 2 日) のアンケート調査をキャンプ 2 日目の終わりの会で研修室にて実施した (キャンプの概要は、2.3. に示した)。質問内容は、「キャンプはたのしかったですか」に対し、「たのしかった」「ふつう」「つまらなかった」を選ぶ質問と、楽しかったプログラムを選ぶ質問、そして「キャンプでいちばんのおもいではなんですか」「好きなことをじゆうにかいてね」の記述式質問の 4 問で、マンツーマンスタッフが質問した後の本人の記述を引

用した。

2.2.2. 描画法（絵日記・バウムテスト）

描画法は、参加者へのアンケート調査に引き続き、絵日記実施後、バウムテストを本研究者が実施した。バウムテストは、コッホによる一般的な実施方法で行った¹⁵⁾。準備物として画用紙（A4）と鉛筆と消しゴムを用意し、「実のなる木を1本描いてください」と伝えた後、子どもの主体性を尊重し、あまり制限を設けず、絵日記で使用した色鉛筆やクレパスを使用することも認めた。実施時間は20分から30分とし、キャンプ前（事前説明会：#1）、キャンプ後（第1回キャンプ振り返り会：#2）（第2回キャンプ振り返り会：#3）、に3回行った。分析方法は、主にA君が描いた木のかたちの分析（形態分析）、鉛筆のうごきの観察（動態分析）、木の紙面における配置（空間象徴）を記述し、どう捉えるかわからない時は質問後、文献¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾を参照し描画の意味を分析した。

2.2.3. 保護者へのアンケート

保護者へのアンケートは、保護者が子どもにキャンプについて質問し記入するアンケートと保護者が答える項目があり、キャンプ後1週間以内にFAXまたはGoogleフォームを用いて回答を求めた。子どもへの質問内容は参加者への選択式アンケートの2問（2.2.2.参照）と「次のキャンプでしたいこと」「スタッフへのメッセージ」であり、保護者への質問は、「キャンプに参加し、お子様に変化はありましたか」という質問に「はい」「いいえ」で答える選択問題と、「はい」と答えた方に変化の内容を聞く質問、その他の意見や感想であった。質問や提案の内容には、保護者や関係者へ聞き取りを行行情報を収集した。

2.2.4. マンツーマンスタッフの報告

マンツーマンスタッフが個々の参加者について書いた報告書の記述をもとにスタッフにインタビューし、情報収集した。

2.2.5. キャンプ中の参与観察

全キャンプ期間中の本研究者による参与観

察によってデータを収集した。

2.3. キャンプの概要

2.3.1. キャンプの目的

NPO 法人 B の実施するキッズファミリーキャンプは、発達障害のある子どもを中心にその家族や関係者と共に以下の目的で実施した。

- 1) 参加者の目的：様々なフィールドでの楽しいキャンプ活動経験を通し、子ども同士が互いに助け合うことを覚え、子どもの社会性などの成長を促す。
- 2) 関係者の目的：子どもを理解し支援のあり方を考えるための情報交換や悩み等の話し合いを通し、参加者の課題を明確化し、参加者の課題解決を目指す。

2.3.2. キャンプの日程とプログラム

1) キャンプの日程

キャンプの日程は以下の通りである。

- ①プレキャンプ：事前説明会：半日（X年6月上旬）
- ②1回目キャンプ：1泊2日（X年6月下旬）
- ③2回目キャンプ：1泊2日（X年11月上旬）
- ④3回目キャンプ：1泊2日（X年12月上旬）

2) キャンププログラム

プレキャンプ（事前説明会）は、C市内の会議室で行われた。②～④のキャンプは、D野外活動センター（1泊2日）で行われた。②～④のプログラムは、発達障害のある子どもたちに配慮し、構造化された同じスケジュールで行っている（表-1.）。

表-1. キッズキャンプ：基本スケジュール

	参加者	保護者	スタッフ
【1日目】			
12:30			スタッフ集合 ミーティング
13:00	しゅうごう	集合	
13:20	しゅっぱつ	出発	出発
14:00	おかいもの	買い出し (勉強会用) 施設到着	買い出し (プログラム用) 施設到着
15:00	とうちゃく		
15:30	プログラム①		
17:00	やすみじかん		
17:30	ゆうごはん	夕食	夕食
18:30	プログラム②	プログラム見学	
19:30	おふる	お風呂	お風呂
21:00	おやすみなさい	保護者の勉強会	読書レポート ミーティング
【2日目】			
7:00	おはよう	起床	起床
8:00	あさごはん	朝食	朝食
9:00	おそうじ	掃除	掃除
10:00	にもつせいり	荷物移動	荷物移動
10:20	やがいりょうり	野外料理	野外料理
11:30	おひるごはん	昼食	昼食
12:30	かたづけ	片づけ	片づけ
13:00	終わりのかい (えにつき)	終わりの会 (絵日記・描画)	終わりの会 (絵日記・描画)
14:00	しゅっぱつ	出発	出発
15:00	かいさん・またね	解散	解散(引継ぎ) ミーティング

プログラムの中の「プログラム①と②」、「野外料理」の内容は、キャンプ（6月、11月、12月）ごとに変わる(表-2.)。さらに、保護者の勉強会(表-1. 表-3.)は、子どもの就寝時間から保護者を対象に、子どもの理解・支援の在り方を考える交流・勉強会を行っており、その後、スタッフは、ミーティングを行う(表-1.)。

表-2. プログラム内容

	1 回目キャンプ (6月)	2 回目キャンプ (11月)	3 回目キャンプ (12月)
プログラム ①	名札づくり 宝探し(施設探検)	運動会	クリスマスクラフト リースづくり
プログラム ②	キャンプ ファイヤー	ハロウィン パーティ(新試し)	キャンドル ファイヤー
野外料理	そうめん おにぎり	カレー(甘口・辛口) ナン	お子様ランチ

表-3. 保護者の勉強会

	勉強会①(6月)	勉強会②(11月)	勉強会③(12月)
テーマ	アイスブレイク 自然体験	子どもの成長と キャンプ	地域(キャンプ)で 支える子育て
講師	NPO 法人 B 代表 障害児者キャンプ専門家	大学教授 臨床心理士	大学教授 障害児者キャンプ研究者
内容	自己紹介・交流会 竹細工(竹の食器づくり)	交流・相談会 描画法とキャンプ	交流・相談会 子育て支援

2.3.3. キャンプグループ

1) 参加者

参加者は、2歳から12歳までの子どもたちであり、発達障害のある子どもとそのきょうだいや障害のある人と共に行うキャンプに理解のある保護者の子どもたちが参加している(表-4. 表-5.)。

表-4. 男女別参加者(子どもの)数

	① 事前説明会	② 1 回目キャンプ	③ 2 回目キャンプ	④ 3 回目キャンプ
男	9(4)名	8(4)名	9(5)名	5(1)名
女	2(0)名	2(0)名	3(1)名	0(0)名
計	11(4)名	10(4)名	12(6)名	5(1)名

(1) 発達障害のある子どもの数

表-5. 年齢別参加者(子どもの)数

	① 事前説明会	② 1 回目キャンプ	③ 2 回目キャンプ	④ 3 回目キャンプ
幼児(2-5歳)	4(1)名	5(1)名	7(3)名	4(1)名
小学生(6-12歳)	7(3)名	5(3)名	5(3)名	1(0)名
計	11(4)名	10(4)名	12(6)名	5(1)名

(1) 発達障害のある子どもの数

2) 保護者

保護者は、キャンプの内容を知ってもらうことを目的に、初回のみ必ず参加をお願いしている。その後は、キャンプ参加(見学)または不参加を選ぶことができる(表-6.)。

表-6. 保護者の参加者数

	① 事前説明会	② 1 回目キャンプ	③ 2 回目キャンプ	④ 3 回目キャンプ
父	4名	3名	5名	3名
母	6名	5名	4名	2名
計	10名	8名	9名	5名

3) スタッフ

キャンプの活動は、主に E 大学社会福祉学科の学生で支えられている。学生は、社会福祉学科(1年生対象)で受講する授業「社会福祉フィールドワーク 19)」をきっかけにキャンプボランティアをスタートし、大学の授業と並行しながら4年間継続することが多い。約10~15名の大学生スタッフとNPO 法人 B を経験したスタッフ(上級生・社会人)と専門家が協力し、下記のような組織でキャンプを運営した 20)。

- ① キャンプディレクター(CD:本研究者):1名
- ② ソーシャルワーカー(SW:NPO 法人 B OB 社会人スタッフ):1名
- ③ 看護師(Ns: NPO 法人 B 社会人スタッフ):1名
- ④ アシスタントディレクター(ACD:E 大学社会学研究科院生):1名
- ⑤ プログラムディレクター(PD:E 大学社会福祉学科学生):1名
- ⑥ マネジメントディレクター(MD:E 大学社会福祉学科学生):1名
- ⑦ マンツーマンスタッフ(Co:E 大学社会福祉学科学生):子どもと同数
- ⑧ プログラムリーダー・フリースタッフ(PL・FS:E 大学社会福祉学科学生):3名
- ⑨ 保護者勉強会講師:1名(表-3. 参照)

スタッフミーティングは、キャンプ3ヶ月前にディレクターミーティングを行い、1から2ヶ月前から週1回のペースで、学生スタッフミーティング(スタッフ紹介、対象者の理解と支援、役割確認、プログラム検討・準備)を行う。キャンプ前のミーティングでは、主に行程と引継ぎ方法を確認する。キャンプ1日目夜のミーティングでは、活動記録を基にCoがキャンパーの様子と感想を報告し、ディレ

クターの総評後、2日目の行程と準備を確認する。キャンプ終了後のミーティングも、1日目同様に行い、次回の課題や準備を確認する。さらに、参加者個々の活動記録や保護者へのアンケート、絵日記、バウムテストの結果に基づき、ディレクターミーティングを行い、次のキャンプに反映する。

2.3.4. キャンプスタッフの基本方針

キャンプスタッフの指導上の基本方針は、次の通りである。

- ①安全第一を原則として、安全に関する介入は最優先する。
- ②プログラムでは安全の範囲内において常に子どもあるいはグループの決定や自己責任を重視する。
- ③日々体験したことを振り返る時間を設けグループ内で共有する。
- ④「終わりの会」(振り返り)では自己主張あるいは、個人の多様な価値観を尊重する。
- ⑤体験の達成感を与えることができるようにする。

上記の基本方針をスタッフ間で共有していた。また基本的には、各スタッフにキャンプカウンセリングは任されており、状況に応じてカウンセリングを柔軟に行うことを確認していた。

3. 事例の概要

対象児：A君 6歳 (小1)

家族構成：父、母の3人家族

診断：神経発達障害²¹⁾(空間認識障害、ADHD、LD)

キャンプに期待すること：事前の母親との話し合いで、「自然の中での工作」「野外料理」「スタッフがA君の特性を知っておいてほしいこと」が特に挙げられていた。

問題歴等：A君は、2歳から療育(個別・集団)やソーシャルスキルトレーニング、運動教室に通っている。ルールのある活動は苦手である。人見知りや場所見知りをするが、慣れてく

ると、言葉や活動が衝動的になり、相手にとって不快な言葉遣いをしてしまい対人関係でトラブルになることがある。聞くことや表情やその場の空気を読み取ることが苦手なため、自分の思いを上手に伝えることができない。感情のアップダウンが激しい時は、クールダウンするまで待ち、違う活動で切り替える。衝動性から大きなけがをしやすく、痛みを感じにくいため自覚していないことが多い。睡眠に関しても、疲れている時でも長時間眠ることができない。夜間はおむつを使用している。また、工作やレゴ・LaQが好きで、走ることや自転車に乗ることが得意である。

3.1. 事例の経過

3.1.1. プレキャンプ(#1:事前説明:X年6月上旬13時30分~16時)

プレキャンプとは、キャンプの説明会(顔合わせ)のことであり、C市内会議室で行われた。内容は、団体紹介とキッズファミリーキャンプの説明、スタッフの紹介、参加者とその家族の紹介であった。キャンプの説明は、スライドを活用し、キャンプのイメージをつかむ時間を持った。A君は母親と一緒に参加していた。子どもたちに絵日記風に「キャンプでしたいこと」を書くように伝えたが、書き始める子どもが少なかったため、家族と一緒に書いてもよいと伝えた。A君は、その場の雰囲気になじめなかったのか、自分では描かず、母親が、火の絵とご飯という文字を代筆していた。A君は、母親と一緒に座り、スタッフが話しかけても声が小さく、一人でいることが多かった。

バウムテストは、集団で行った(図-1.)。画用紙を横向きにして書き始める。描かれた1本の木はほぼ用紙の中心に描かれている。木の大きさは、用紙の1/3程度であるが、左右の空白が目立つ。木と実の部分の筆圧は強いが、土(根)の部分は筆圧が弱く、線が細い。木の左右のバランスは、ほぼ均等である。木の幹は太く、長い二線幹である。枝はほぼ直線枝であり短い。そして二線枝が4本描かれ、それ

それぞれの枝に一つずつ明るい赤と緑の実が4つ描かれている。枝には葉はない。幹の中間部にわずかな膨らみがあるがほぼ平行線である。幹の先端は2つに分かれている幹上開に見える。根は一線根であり、幹の太さに比べ根が細く、木を支えるには不安定な印象を持った。

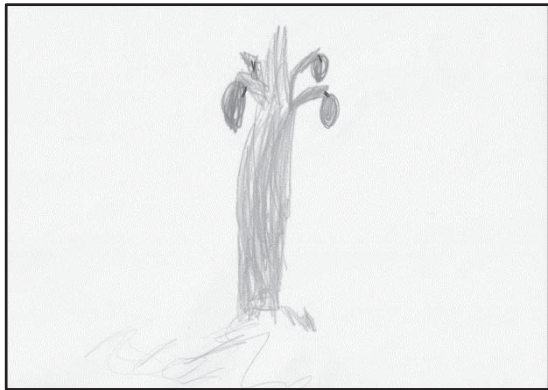


図-1. バウム①

3.1.2. 1回目のキャンプの経過（#2:1 泊2日:X年6月下旬）

A君は、母親と一緒にキャンプに参加した。1日目、集合場所から電車で30分乗る。駅の近くのスーパーで食材を買い、20分ほど坂を上るとキャンプ場に到着した。到着後、グループに分かれ名札づくりを行なった。プログラム中、母親が横にいることが多く、F(Co)よりも距離が近い。名札のひもを友達の上にひっかけては母親とFに注意される。また木にひもを通し完成した名札を振り回し、他の子どもに当たり、再度、母親とFに注意され、A君から他の子どもへの言葉もきつい印象を持った。

次に施設の中で宝探しを行った。班で行動したが、「全部自分がする」と1人で行ってしまい、班のメンバーは困惑していた。Fが、A君にみんなですることを伝えると、少し聞いてくれ、他の友達と協力する場面が見られた。A君は遊びの中でルールを守らない子がいると年下の幼児・スタッフに対しても同じように注意してしまう。夕食後のキャンプファイヤーでは、じゃんけん列車など火の回りで

うゲームで盛り上がり興奮している様子であった。ちょうどその時、火が目に入ったとFに伝える。Nsに確認してもらおうが特に異常はなかった。その後お風呂に入り、21時の就寝時、懐中電灯を人に向けて照らし、スタッフに注意される。そんな中で、同時間より保護者の勉強会が行われ、自己紹介とそれぞれの子育てについて話し合った。A君の母親からは「キャンプをすることで子どもにどんな変化や効果があるのか」との質問があり、集団での野外体験やレクリエーションを通して、学校や家庭以外の新しいお友達やスタッフとの関係づくり（社会性）を学び、居心地の良い場所になることや助け合う心が芽生えることなどを説明した。A君の母親からは、成長への関心の高さが伝わってきた。A君は、その後も何度も勉強会の部屋（母親の部屋）を覗くなど、興奮が収まらない様子であった。母親もA君のことが気になる様子であり、最終的に母親の部屋と一緒に就寝した。

2日目、7時に起床し、朝食後部屋の掃除や部屋遊びを行なった。この時間に大人は、キャンプ場近くから竹を切り出し、竹のお皿、お箸、コップづくりをスタートした。その後、子どもたちは野外料理で、そうめんとおにぎりを作った。A君はそうめんのねぎを切るお手伝いをした。その後は、G君とH君と遊んでもめたり、Iちゃんが転がして遊んでいた竹を取ったり、お友達が嫌な思いをしていると聞き、FがA君を注意すると、友達に「ごめんなさい」と謝っている姿が見られた。キャンプの終わりの会で、アンケートで「楽しかったことは」の質問では、「キャンプファイヤーとねるときおちゃかい（保護者の勉強会）のへやでねれてよかった」と書いてあった。このキャンプ一番の思い出は、G君と遊んだことと書かれていた。絵日記（図-2.）は、キャンプファイヤーが描かれていた。文字の部分には、「火が目に入ったよ」という記述があり、それくらいキャンプファイヤーの火が印象的であったと感じた。

バウムテスト（図-3.）は、画用紙を前回と同様に横向きに使用していた。描かれた1

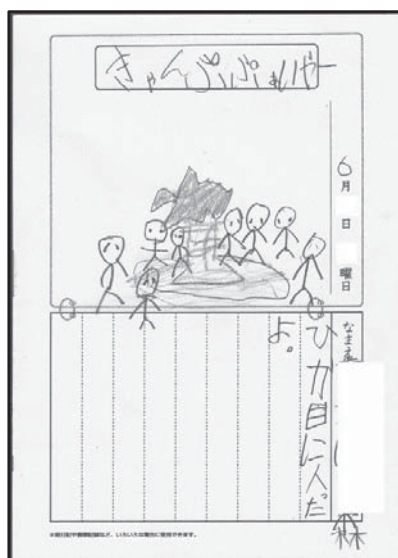


図-2. 絵日記①

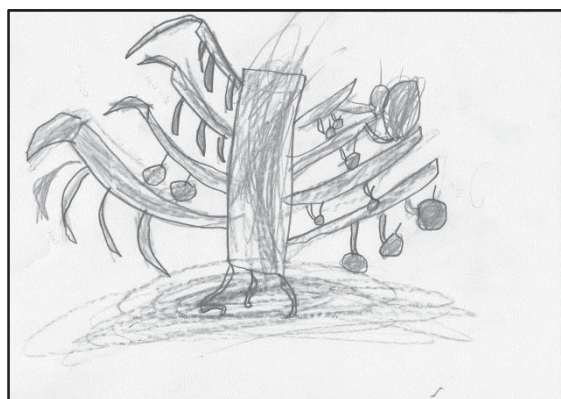


図-3. バウム②

本の木はほぼ用紙の中心に描かれている。木の大きさは、用紙の2/3程度である。全体的に筆圧が強いことから、自己主張の強さや活発さや積極性が読み取れる。まず黒の鉛筆で木を描いてから、色を付けていた。木の左右のバランスは、ほぼ均等である。木の幹は、太く、長い二線幹である。枝先直な二本枝が左右各4本描かれ、先端は幹上直になっている。それぞれの枝に2つから4つの様々な実が描かれている。左側枝先端の下側に接ぎ木している。中間部にわずかな膨らみがあるがほぼ平行線である。右側の上二本の枝は、先端が2つに分かれている。根は、細い根が3本土の中にあるように描かれているが、実と枝を支えるには

細い根であり、不安定さが表れている。前回よりも幹が太く、枝が広がり、実も増えている。いろいろな実が何か尋ねると、「これは、リンゴリラ」「これは、バナナ」「これは、腐ったバナナ」「これは炎のバナナ」「みかかかん」など説明してくれた。

キャンプ後、A君の母親から、「A君がキャンプに行きたくないといっている」とメールがあった。電話にて理由を尋ねてみると、A君に積極的に話しかけるタイプのF(女性 Co)から、A君のペースを崩さず見守り型の男性 Coに変更をお願いしたいと依頼があった。Fに話を聞くと、注意の仕方や関わり方に難しさを感じている様子であった。その後、スタッフで話し合い、トイレやお風呂等も見守ることができるよう上級生の男性スタッフに変更することにした。母親に、変更可能であることと、A君のバウムテストの変化について伝え、母親とA君で相談することになった。その後「今からキャンプに参加できますか」と母親より連絡があり、2回目のキャンプに参加することになった。CDより、次回は少しずつA君から離れて見守っていただければと母親に伝える。

3.1.3. 2回目のキャンプの経過（#3:1 泊2日:X年11月上旬）

2回目のキャンプ前に、学校での対人関係での問題行動が多く、かなりストレスが溜まっている様子であると母親より報告があった。しかし、今回は母親がA君を遠くから見守っている。A君は、1日目プログラムの運動会では、参加者の中で1番積極的に参加した。リレーも、綱引きも動きが良かった。特に歌とダンスは、プログラムリーダーの前で1番積極的に踊っていた。

夕食後のハロウィンパーティは、母親と一緒に対決型肝試しに楽しく参加した。「大人がまだきていない」など周りを思いやる気持ちも見られた。お風呂の後、友達と3人で遊んでいたが、レゴの冊子を見ている間に一人で就寝した。

子どもの就寝時間に行われる大人の勉強会では、前回同様に保護者の自己紹介と悩み等の相談会を実施した。A君の母親は、「親もいつまでも元気でいられない。子どもにできることを全てやりたいと思うとやりすぎてしまう」と自身の健康の不安について語られ、「子どもには早く育ててほしい」とも話され、母親の焦燥感が伝わってきた。

2日目、朝食後の休憩時間も友達とCo達で行うだるまさんがころんだと戦いごっこが楽しい様子である。だるまさんがころんだでも、友達が動いていないといても、「動いていた」と何度も言ってしまう、友達が泣いてしまう場面もあり、ルールに厳しく、融通が利かない。Co達も対応に困っている様子である。その後の野外料理では、カレーとナンを作った。ナンをこねたり、成形するのが楽しい様子で、積極的にナンづくりに取り組む。後片付けのお皿洗いは、自分の食器だけではなくスタッフの食器も洗うほど積極的に参加し、大人からも褒められて嬉しそうであった。ほとんどのプログラムで母親が遠くから見守っていたことや友達との関わりが多くなり、J(Co)や他のCoとの関係性も前回より良くなっていた。

キャンプの終わりの会で、アンケート用紙には、Jとの戦いごっこについて書かれていた。絵日記は、明るい色使いでナンが描かれていた。文章は「ぼくはキャンプでカレーづくりをしました。ナンをこねました。こねていたらふわふわ」と記入されており、楽しさが伝わってきた(図-4.)。

バウムテスト(図-5.)は、画用紙を縦向きに使用している。描かれた1本の木は少し左寄り、木は、用紙いっぱい描かれている。木と実の部分は筆圧が強いが、土(根)の部分は筆圧が弱く、線が細い。木の幹が太く、長い二線幹である。枝は長く太い枝が左右2本ずつ描かれ、左の枝の上部にはさらに左右4本ずつ枝が描かれその先に実が描かれている。

上部の右の枝は太く、実はない。下部の左右

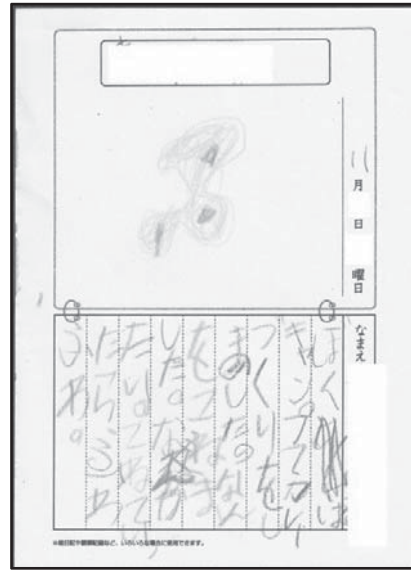


図-4. 絵日記②



図-5. バウム③

の枝はさらに分岐し、それぞれに実が描かれている。枝には葉は描かれていないが実の上に葉が数枚描かれている。幹はほぼ平行線である。幹の先端は2つに分かれている。2回目に続き今回も幹が太く、長く、枝がより細かくわかれて、実もカラフルで、独創的に見えた。1つずつ聞いてみると、「これは、さくらんぼ」「カミナリ」「炎」「黄色いリンゴ」「かわいいみかん」「ただの水」「ドクロ」「あおりんご」「みずいろカミナリ」「くさのないオレンジ」「家で植えてる秋ナス」「ようわからん」「腐っ

たバナナ」「家でゴーヤもつくってる」と自分から説明してくれる場面があり、前回よりも心を開いている印象を持った。さらに、2回目のバウムテスト(図-3.)では、左右4本の長い枝にたくさんの実が描かれており、幹と枝や、枝の左右バランスの悪さから他者との関係のあり方が不安定であることが窺われたが、今回のバウムテスト(図-5.)では、前回よりも幹に対する枝と実のバランスがとれており、程よく人との距離が取れるようになってきたことが見受けられた。

キャンプ後、A君へのアンケートには、「キャンプが楽しかった。特にハロウィンパーティ、枕投げ、クッキング、絵を描くこと、が楽しかった」「次のキャンプでは、何かを拾ったり、こねこねしたい」「また参加したい」と書かれていた。

キャンプ後の保護者(母親)へのアンケートも「キャンプ後子どもたちに変化はありましたか」という質問に対し、「はい」と記されていた。具体的には、「リフレッシュが思い切りできたみたいで、表情が明るくなった気がします。キャンプのことを宿題の作文に何ページも書いていたり、翌日学校の担任の先生にキャンプの話をとくさんしたそうです」と書かれていた。自由記述欄には、「最初行くのを嫌がっていましたが、無理やりでも(苦笑)行かせて良かったです。初めて夜中に起きてトイレに行けたことがうれしかったです」と書かれていた。

さらに、保護者自身の変化としては、「自分自身を客観的に見つめることができた」「1回目のキャンプでは、緊張し、周りが見えていなかったが、2回目のキャンプでリーダー・スタッフの関わりから学ぶことと尊敬することが多く、自身もいっぱい癒された」などの報告があった。A君のキャンプの感想では、「ナンをこねてる時が一番楽しかった」と書かれていた。またその時そばにいたスタッフがとても面白く、ナンづくりや後片付けを褒められて、

とても楽しかった様子であった。母親によれば、A君が「めちゃめちゃ楽しかった」というのは、年に2~3回しかないこと、キャンプ後の授業参観もとても上手くできていたとの報告があり、授業態度が良くなったことが伺われた。3回目のキャンプは、予定がすでに入っておられたため欠席となったが、キャンプ後のミーティングで、スタッフから「次回はA君の好きなこねこね作業のある野外料理をしよう」「火のまわりにもよく来ていたから火起こしにも興味があるかも」「絵を描いたり、クラフトも好きそう」という意見や「集団遊びの中でA君や他の子ども達にどのような声掛けやサポートをしたらよいか」という意見が挙げられ、「年下にはやさしくしようかって言ったらどうかな」などの声も上がった。その場にいるスタッフは具体的な会話や行動をスタッフミーティングで報告し、考察していくことになった。

4. 考察

4.1. A君の成長についてーキャンプを通して社会生活を学ぶー

事前説明会(#1)と1回目のキャンプ(#2)は、A君と母親の密着は、かなり強いものであったが、2回目のキャンプでは、母親から離れ、友達やスタッフと過ごす時間が増えた。母親からA君への関わりを調整することで、徐々に子ども同士やスタッフとの関わりが増え、いろいろな人とのつながりにより安心感が生じ、母親から離れることができたものと思われる。1回目のキャンプ(#2)では、完成した首に付ける名札を出会って間もない友達の首にかけたり、振り回して友達に当たることがあった。友達と遊びたいので関わりを持とうとするが、関わり方が上手いはず、友達が戸惑ってしまう場面があった。また、グループで行う宝探しを一人で行ってしまう事もあったが、Fからみんなでやろうと提案されると、スタッフの提案を受け入れることができ、みんなで協力

できた場面も見られた。2日目の野外炊事では、積極的にねぎを切るなどしており、スタッフもA君の得意な活動がわかってきた。

2回目のキャンプ(#3)では、遊び友達も定着してきた一方、遊びによっては、ルールに厳しく融通が利かないなど課題はあるが、野外料理で小麦粉をこねる作業や後片付けに積極的に取り組んだことをスタッフに褒められて、さらにスムーズに行動が修正できるようになった。キャンプをみんなと一緒にできる場面も増えてきた。発達障害の子どもたちにおいては、早期の手厚い支援が効果的であり、子ども特有のニーズに合わせるための個別化されたプログラム支援が必要となる²²⁾²³⁾。

また、キャンプを通して、親から離れて就寝することができたことや夜尿がなかったことは、A君の大きな自信となったように思われた。A君が、2回目のキャンプ(#3)で友達と本を読んでいるときに自然と眠ることができた経験は、その後の様々な宿泊体験や新しい体験に挑戦するきっかけとなったと考えられる。1泊の宿泊体験であっても、A君のような子どもにおいては、生活面の改善に大きな効果がある。

このような、A君の成長は、バウムの変化からも認められた。描かれた木は、幹の太さに違いがあるものの、1回目のバウムから2回目のバウムでは、外に広がる太い枝が多く描かれた。ボーランダーは、枝は、自己のエネルギーの通り道を示し、他者に対する態度や家族との相互作用の手がかりが見出される²⁴⁾と述べている。このことから、キャンプにおける他者への興味、関心の広がりなどの外向性の変化や母親との心理的距離感などの変化を感じさせるものであった。また、幹を支える根も一線根から二線根になり、少しずつ太くなり、安定感が増している。根はしばしば、衝動性を示す²⁴⁾と言われているが、このことは、キャンプが進むにつれて、自己のコントロールができるようになったことと重なると思われた。さらに、様々な種類の実が描かれるようにな

り、キャンプ参加による肯定的な感情の表現²⁴⁾を示したものと思われる。

一方で、留意しなければならない点もいくつか認められた。実には、未熟さや短絡的思考を象徴する^{15) 18)}面もあり、A君のネガティブな特徴を示しているとも考えられた。また、幹と枝に比べ根が細く不安定な印象であることや、描かれた3枚はいずれも、枝を覆う葉が描かれておらず、外にさらされている。これは、社会的である反面、自分と他者との境界が明確でないことが心配された。しかしながら、このようなことを差し引いたとしてもバウムテストからは、キャンプにおける成果が窺われた。

このようなキャンプにおけるA君の体験は、他者と関わりたい気持ちと行動をコントロールし、仲間を作ることを学ぶ場でもあり、野外料理など楽しい、集中できる活動と出会う場でもある。さらに生活面の改善は自信にもつながり、新しい活動に挑戦するきっかけになると考えられる。

4.2. 障害のある子どもの親を支えることの意味

子育て中の親は、子育ての在り方に不安を持ちながら行っていることが多く、孤立しやすい傾向がある。特に発達障害児を育てる親は、精神的な健康度が低下するリスク²⁵⁾や心理的な負担感や困難を抱えているといわれている²⁶⁾。A君の母親も例外ではなく、キャンプにおいて、自身の精神的、身体的な健康の不安を語っていた。キャンプにおいて、誠意をもって母親の話を聴くことは、日頃の養育の労いとなり精神的な健康度の向上に役立つものと思われる²⁶⁾。

発達障害児の親が育児に適応するために必要な要素として、①子どもに関する知識を豊富に持っていること。②社会的に十分な支援を受けていること。③育児を行うことを肯定的にとらえていることの3点が上げられている²⁵⁾。このような状況の中、安心して子ども

をキャンプに預けてもらうためには、子どもがキャンプを楽しんでいることを確認してもらい、スタッフに子どもを任せてもらえるようになるための準備も必要である。その為に、今年度キャンプ(#1, #2, #3)では、親の「レスパイト(休憩・リフレッシュ)」、「交流会」、「子育ての勉強会」、「親のためのキャンププログラム」等のプログラムを子どもたちのプログラムと同時進行で行なった。第1回目の勉強会(#1)では、自己紹介を中心に、子育てストーリーを自由に話し合う時間を持った。反抗期の子育ての難しさ、子どもの気になる行動や対応と課題についてそれぞれが話し合い、様々な考えや体験について知る機会となった。第2回目の勉強会(#2)も、子どもの気になる行動や対応と課題について親同士話し合い、それぞれの子育てを客観的に振り返る機会となっていた。また、日常とは異なるA君を知る機会となった。このような保護者の体験は、A君の母親においても支えとなりA君との関わりにおいても適切な距離感ができ、余裕をもってA君を見守れるようになった。このようにA君の母親の養育態度にも影響すると考えられる。

4.3. スタッフが実践を学ぶ現場として

スタッフは、大学生・大学院生・社会人で主に構成されている。主に社会人スタッフと大学院生・上級生スタッフが全体計画を作成し、大学院生と大学生スタッフが子ども対象キャンプのプログラムの企画・運営をし、社会人スタッフが親のプログラムの企画運営を行っている。下級生スタッフは、Coとして個別支援を行うために、インテークをもとに、事前説明会(#1)で子どもたちや保護者に直接ヒアリングし、参加者の個別支援(対象者や活動の理解)を学ぶことになる。また、キャンプ・レクリエーション指導の実践を通しその技能を高めている。さらに、事前説明会やキャンプは、子どもたちの理解のみならず、障害を抱える子どもの保護者への理解の場にもなっている。

例えば、なぜ保護者にとって、勉強会やリフレッシュが大事かについて理解が深まったと語るものが多い。

実際のキャンプでは、計画通りにいかないことも多く、そこから学ぶことも多い。雨が降るなど天候の変化によりプログラムの内容を変更することを余儀なくされることもある。また、子ども同士で喧嘩になり、一方が泣き始めてしまったとき、どのように仲介するのかは、Coに任されており、不測の事態に対応しなければならない。本事例では、1回目のキャンプ(#2)の後、母親からCo変更の要望があり、Coを変更するか検討することもあった。スタッフが、要望をすぐに理解できる事もあるが、理解することが難しい場合は、スタッフミーティングや個別相談を通して状況を把握し、メンバーの特性や役割を調整し、次の実践につなげる学び合いの機会でもあった。変更したF(Co)とJ(Co)は、いずれもこのことを通じて自己理解が促され自己成長の場となった。また、このようなエピソードを通じて、スタッフは、チームで支援することの大切さを学んでいると考えられる。

ディレクタースタッフは、参加者はもちろん、関係者が楽しく、充実したキャンププログラムになるように全体目標を立て計画・実践を行っており、子どもはもとより、Coである下級生スタッフの対応について受容的な関わりで接している。福祉・教育・医療等様々な視点をもつディレクタースタッフで行う事例検討は、発達障害のある子どもの居場所や支援の在り方や社会的課題解決といった広い視野で検討する場にもなっており、それらを同時に行うことで、結果として福祉を支える人を育てる場となっている。

5. まとめ

本稿では、NPO法人Bが主催するキッズファミリーキャンプに参加した発達障害のあるA君の事例を通して、A君と、保護者、スタッ

フの相互成長について検討した。A君にとっては、新しく出会う人との関わり方(社会性)や生活を学ぶ場であった。保護者にとっては、子どもとの関わりを客観的に見ることで心理的距離の取り方を学ぶ場でもあった。スタッフにとっては、福祉やキャンプ支援をチームで協働しながら学ぶ場であり、A君、保護者、スタッフの相互的成長に意味があった。相互に理解を深めるキャンプ実践は、子どもや保護者、支援者が連携し、工夫しながら共に自然の中で生活する取り組みであり、日常生活にも良い影響を与えると期待される。

謝辞

本研究にご協力頂きました皆様に深謝申し上げます。本研究は、JSPS 科研費(JP16K01897)および桃山学院大学特定個人研究費(2016年度)による研究成果の一部である。

注および引用文献

- 1) 坂本昭裕(2002):アメリカにおける非行少年に対するアウトドア体験療法—心理社会的効果に関する実証的研究の動向と課題—、臨床心理身体運動学研究、日本臨床心理身体運動学会、3:1、5-34.
- 2) 石田易司(2000):Camping For All—障害者キャンプマニュアル—、エルピス社、大阪、6-9.
- 3) 竹内靖子(2015):大阪市とその近郊における障がいのある人のキャンプ実態に関する調査、桃山学院大学総合研究所紀要、40(3)、105-118.
- 4) 野村寿子(1999):遊びを育てる—出会いと動きがひらく子どもの世界、協同医書出版社、東京、26-39.
- 5) 文部科学省:通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について、Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2

012/12/10/1328729_01.pdf

(2017年9月19日確認)

- 6) 石田易司(2000):Camping For All—障害者キャンプマニュアル—、エルピス社、大阪、14-15.
- 7) Sara Gage(2017):キャンプロイヤルの歩みと可能性、シンポジウム「自閉症と豊かな暮らし—キャンプロイヤルから学ぶ—」報告書、エルピス社、兵庫、13.
- 8) 石田易司、竹内靖子、野口和行(2014):自閉症と豊かな暮らし、晃洋書房、京都、5&8.
- 9) 坂本昭裕(2008):長期キャンプを体験した不登校児の風景構成法の検討—描画の構成型に着目して—、臨床心理身体運動学研究、日本臨床心理身体運動学会、10(1):25-40.
- 10) 高橋知音(1993):キャンプ療法による登校拒否児の樹木画の変化—バウムテストの全体印象による評価—、カウンセリング研究 26(1):19-28.
- 11) 幼少年キャンプ研究会(1992):登校拒否児に対するキャンプ療法の効果、伊藤忠記念財団調査研究報告書 23:80-90,147-149.
- 12) 坂本昭裕、渡邊仁、高橋菜生、小田梓(2006):キャンプ療法における不登校児の内的体験の変化—内的体験の変化をもたらす援助要因の検討—、財団法人明治安田こころの健康財団研究助成論文集、42:1-12.
- 13) 辻政博(2003):子どもの絵の発達過程:全心的活動から視覚的統合へ、日本文教出版、東京.
- 14) NPO法人キャンピズ(2010):キャンピズ障がい児・者キャンプ支援者養成テキスト、エルピス社、大阪、94-97.
- 15) C.コッホ著、林勝造、国吉政一、一谷彊訳(1970):バウム・テスト—樹木画による人格診断法—、日本文化科学社、東京、107,117-118.
- 16) 山中康裕、岸本寛史(2011):コッホの『バ

- ウムテスト[第三版]』を読む、創元社、大阪、27-46.
- 17) 岸本寛史(2015): バウムテスト入門—臨床に活かす「木の絵」の読み方、誠信書房、東京.
- 18) C.コッホ著、岸本寛史、中島ナオミ、宮崎忠男訳(2010): バウムテスト[第3版]、心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究、誠信書房、東京、256-264.
- 19) 社会福祉フィールドワークテキスト編集委員会編(2018): 社会福祉フィールドワーク、エルピス社、兵庫.
- 20) 石田易司、竹内靖子、野口和行(2014): 自閉症と豊かな暮らし、晃洋書房、京都、157-166.
- 21) 日本精神神経学会監修(2014): DSM-5 精神疾患の診断統計マニュアル、医学書院、東京、31-32.
- 22) エリック・ホランダー、エヴドキア・アナグノストウ編、岡田章監訳(2012): 自閉症治療の臨床マニュアル、明石書店、東京、245-261,307.
- 23) エリザベス・A・ローガソン著、辻井正次、山田智子監訳(2017): 友達作りの科学 社会性に課題のある思春期・青年期のための SST ガイドブック、金剛出版、東京.
- 24) カレン・ボーランダー著、高橋依子訳(1999): 樹木画によるパーソナリティの理解、ナカニシヤ出版、京都、170.
- 25) 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター(2015): 発達障がい児の育児適応に重要な三要素が世界で初めて明らかに～「養育レジリエンス」に注目～ Retrieved from http://www.ncnp.go.jp/press/press_release151209.html (2017年9月19日確認)
- 26) 仲森みどり、大谷正人(2016): 発達障害幼児の保護者への理解と支援—A 市療育施設の保護者を対象としたアンケート調査より—、三重大学教育学部研究紀要第 67 巻、人文科学、87-98.

(平成 29 年 12 月 11 日 受付)

(平成 30 年 9 月 5 日 受理)